

二重基準思考の弊害

— ホンネ・タテマエ式思考克服試論 —

笠井 尚 (教育学)

はじめに

ホンネとタテマエをめぐる価値判断とコミュニケーションのスタイルは、私たちの生活に多大な影響を与えている。ある場面で、ある人物が発したことばを、額面どおりに受け取ってはいけない。そのことばには、「お世辞（相手に取り入ろうとして、あるいは好意的に見てもらおうとして、必要以上にほめることば）」や「おべっか（上の人のご機嫌をとることば）」、あるいは逆に何らかの悪意のある内容が含まれている場合があつて、注意深く対応しないと判断を間違えることもある。

その場合、一般に問題とされるのは、本心と違った発言をした側の責任ではなく、相手の発言の「真意」を理解できない、聞き手の無粋さである。このようなホンネ・タテマエ型の価値判断ないしコミュニケーション・スタイルは、私たちの生活の中に、どのような形で現れており、私たちは、それにどのように対処していったらよいのであろうか。私たちは、ホンネとタテマエの上手な見分け方を学習し、本当に、それを上手に使い分ける使い手にならなければならないのであろうか。本稿では、この問題について、日常の生活場面での事例を参考にしながら、取り組みへのヒントを探ることを目的としている¹⁾。

I 支持される使い分け論

「ホンネとタテマエ」に、どう対処すればよいだろうか。この問題を考えるために、まず、それがどのような現れ方をするのか、次の事例を元に考えてみる。

[事例1]

女子大生のA子さんは、友達B子さんを伴って、ジーンズを買いに行きました。A子さんは好みのものを試着してみました。

A子「どう？」

B子「ううん、い、いいんじゃない」

B子さんは、「そのジーンズのサイズでは小さすぎる」と思いましたが、つい、心にもないことを言ってしまいました。

この事例をどのように考えるとよいであろうか。

検討すべきは、「なぜ心にもないことを言うてしまうのか」という点である。およそ次のような価値判断が考えられる。

- ① ホンネとタテマエを使い分けるのが大人である。本人がよい、と知っているものにケチをつけることはよろしくない。皆がホンネばかり言っていたら、世の中で争いが絶えない。世の中には、お世辞や社交辞令といった発言があつて、A子は、B子の発言を100%そのままに受け取ってはいけない。
- ② 相手のことを思うと「本当のこと」は言えない。相手を傷つけないと思うやさしさから、心にもないことをつい言うてしまう、あるいは、相手を傷つけないように、積極的にそう言ったほうがよい。
- ③ 「本当のこと」をはっきりと言ってあげるべきである。②、③における「本当のこと」とは、「そのジーンズはサイズが小さい」「それは似合わない」「あなたの体型は太すぎる」「痩せたほうがよい」等々である。
- ④ どうでもよい。A子とB子は真の友人で

はない。本当の友人であれば、心にもないことは言わないものである。つまり、B子はそのジーンズが合うかどうかという問題を、どちらでもよいこと、と思っている。したがって、友達とは買い物に行かない方がよい、買い物は一人で行くべきだ、本当のアドバイスをしてくれる人と行った方がよい、といったことも考えられる。

尋ねる側は、暗に「自分にとってはこれがよいと思う」ということを示した上で、こちらの考えを聞いている。この場合、相手の意見とは違うことを感じて、感じたことをそのまま述べれば、相手の価値判断に対して、反論を唱えることになる。「それは違う」とはなかなか言いづらい。

このような、意見の違いを過敏なまでに避けようとする人間関係は、次のような形で背景を説明することができる。例えば、中島義道は、日本人の社会に導入された「個人主義」とは、西欧と同じものではなく、弱い個人のための弱い個人主義であり、そこでは、真の対話が望まれていない、という²⁾。だから、表向き、対話は必要である、と言われていても、実は誰も、反論したり、されたりすることは望んではいない。大平健は、現代人が対立や葛藤を避ける傾向にあり、それを「やさしさ」というプラスの価値としてとらえていることを指摘した³⁾。対立を避ける言動は、当人の「やさしさ」に由来するものであり、「やさしい」行為が望ましい行為として選択される。千石保は、価値は著しく相対化しており、ああであってもよいし、こうであってもよくなったという状況を、「まじめ」にやるという価値が崩壊した状態として捉えた⁴⁾。人間関係を支配しているのは、その時、その場面の雰囲気によければよいという「ノリ」であり、一般に、ムードをなごやかにする言動が好まれるという。

いずれにしても反対の意見を述べることは、あまり望まれる傾向にはない。この問題への対処は、①に見られるように、むしろ積極的な意義を与えられて、ホンネとタテマエの使

い分けを奨励して、[事例1]にあるような対応を「あるべき姿」として支持する考え方が優勢である。③のように「勇気」を伴わないとできない行動は、普通の人にとっては困難である。たとえ、③のようにしたいという願望があったとしても、②のように、消極的な選択で心を偽るか、④のように考えて、人間をより分けて対応を変化させる方法が残された道となる。この場合、①、②、④は、相手と場面によってホンネとタテマエを使い分ける、という対処が共通である⁵⁾。

II ホンネとタテマエの使い分けの問題点

では、このような使い分けを行なっているよいのであろうか。もし、使い分けしているどのようなことが起こるのだろうか。

加藤典洋は、次のように言う⁶⁾。

そもそも、なぜ、このタテマエとホンネ式の生活を続けるのが、いけないのでしょうか。土居がいったように、それは日本人に固有の考え方で、タテマエとホンネが入れ替わる、でもそれは、「言葉の上では矛盾しても」、「視点が異なるため、ともに真である」と考える仕方、この列島の人々がそこそこうまくやっているとすれば、それはそれで、これが日本社会独特の生態だということ、これを認めてもいいのではないかと考えられないでしょうか。

でも、そういうわけにはいかないのです。なぜなら、そのようなことを続けていたら、僕達で社会で、やがて、言葉が意味をもたなくなるでしょう。考えていることをいわない、それでも考えていると認められるというのですから、いうこと、発語することには、いわば工場ですべての完成品を出荷するというほどの意味しかないことになり、たとえ出荷しなくても工場が動いていけばよい、というわけで、発語すること、「思っていることをいうこと」に誰もが尊敬を払わなくなり、最後、言葉は、意味を失い、死んでしまいます。

使い分け論を是認すれば、私たちが使っていることばが無意味なものになってしまう。ことばが無意味になったところでは、思考や討論は意味を成さない。教育や学習はことばを媒介して行なわれるから、基礎となること

ばに意味が無ければ、学んでいる内容の意味も無くなってしまう。

ホンネとタテマエが使い分けられている状況では、授業で教師が「いじめをなくしましょう」と言っても、いじめは減らない。これは、ことばが通じていないのであるから至極当然のこととも言える⁷⁾。「いじめをなくすべきだ」という目標をタテマエ化して、その影で、「いじめはなくなる」と考えている状態では、討論が行なわれたとしても、そこでのことばは上滑りしている。ましてや、もしも、「いじめたらスツとした」とかホンネで考えている子どもがいれば、「なくしましょう」とお題目を唱えても、そのタテマエを本当に信じたり、行動として選択したりすることはできない。

使い分け論の特徴は、使い分け論の支持者が、それを支持する場面では、自分に対してはタテマエが使われない、と考えていることにある。使い分けがなされる時、その使い分け方は、使い手が決める。相手に対してタテマエを言うかどうか、という選択権は、自分が握っているが、相手からどのような扱いを受けるかは定かでない。自分が相手を信頼してタテマエ（心にもないこと）を言わないとして、相手も同様の態度を自分に示してくれるとは限らない。自分だけはだまされない、自分が信頼している人物からは自分も信頼されているという前提があって初めて安心して使い分けを支持できる。少なくとも、自分が信頼できる人との関係があるから、それ以外の場面で使い分けられるのであって、その関係が危ぶまれるとしたら、無条件で使い分けなど支持できるものではない。たとえ、一部の信頼できる人間関係があったにせよ、それ以外での使い分けを是認すれば、学校教育などのフォーマルな、かつ、偶然出会うことになった人達とかなりの密接な関係を持たざるを得ない集団生活での人間関係は、欺瞞を基本としたものとして捉えられなければならない。そのような緊張関係に、私たちは耐えていけないのではないか。

使い分けることが、大人になることである

とすれば、学校教育の目標も、「ホンネとタテマエを使い分けること」になる⁸⁾。子どもが大人になるための目標は、相手を上手にだますことであって、毎日そのための勉強に励まなければならないというおかしな状況を肯定できるであろうか。もし使い分けを教え、学習するのだとしたら、誰を欺くようにすることが望ましいと目標がたてられるのであろうか。

ホンネとタテマエが引き起こす不和は、それを上手に受け取れない側に問題があるのではない。使い分けようとする人達が、その影響に気づいていないことに主な問題が存在する。「上手に使えない者は世の中をうまくわたってゆけないではないか」という主張も想定される。しかし、多くの人達が実際に感じているように、優れた社会人は使い分けのような行動をとらない。たとえ上手に使っている人達が社会的に成功しているように見えたとしても、それを見習って自らもそのようになることには、一種の後ろめたさのようなものがつきまとう。それは、上で見てきたように、ホンネとタテマエというやり方が、欺瞞を基本とする人間関係をつくり出すからである。

Ⅲ 使い分け回避の糸口

使い分けが選択されてしまうのは、とくに、そうすることで、当面の問題が先送りにできるという魅力にもよる。相手の意見を否定しないのも、今、ここでことを荒立てることは得策ではなく、この場を無難にやり過ごしたいからである。

しかし、先送りにしても問題は本質的に解決しない。ホンネとタテマエを使い分けるとおおよそよいことはない。では、どうしたらよいであろうか。

[事例 2]

女子大生のC子さんは、ある日、髪にパーマをかけました。次の日友達に会って、感想を聞いてみました。

C子「どう？」

D子「個性的で、いいじゃん」

E子「雰囲気変わって、いいかもね」

D子さんや、E子さんは、「その爆発したような髪型は最悪だ」と思いましたが、つい、そのように返事をしてしまいました。その後、D子さんの頭は、その「最悪な」髪型のままでした。

心にもないことを言う場合、相手に問われて、やむを得ずそう言うってしまう、ということも考えられる。しかし、[事例2]の場合は「やむを得ない」といった消極的選択以上のものが含まれていることがわかる。もし問われたことだけに答えるのであれば、「個性的で、いいじゃん」「雰囲気変わって、いいかもね」の、「いいじゃん」「いいかもね」という発言の後半部分は必ずしも必要ではない。「個性的ね」とか「雰囲気変わったわね」で止めることもできる。後半の価値判断の部分は、聞かれた感想を答えるためというよりは、もっと踏みこんだ内容を伴っている。「私はあなたに賛同している」という判断を示すことで、相手の判断に擦り寄っている。前半部分だけで終わるよりも、相手の意見を肯定することで関係をより良好にしたい、ご機嫌を取りたい、という積極的な意図を含んだ発言になっている。この場合、やむを得ず言ってしまった、という人間関係を壊さないための発言を超えて、過剰な自己保身の姿勢を見ることができる。

発言の仕方を吟味することで、ホンネとタテマエの呪縛から少しだけ自由になれるだろう。その髪型は確かに「個性的で」「雰囲気変わった」のだから、前半で止めれば、ウソをつかずに済む可能性がある。[事例2]を根拠に、使い分けの必然性を説明することはできそうにない。

[事例3]

G子さんの誕生日にF子さんは手作りのケーキを贈りました。後日、F子さんは、感想を聞きました。

F子「ケーキ、どうだった？」

G子「ううん、お、おいしかったよ」

G子さんは「おいしくなかった」と思ったにもかかわらず、つい、そう言うてしまいました。G子さんには、その翌年から、毎年同じプレゼントが贈られ、ケーキ地獄に苦しむことになりました。

おいしくないものを「おいしかった」と言う事例は、この他にもある。彼女のおいしくない手料理に対して「おいしかった」と言うてしまった男子学生などにも同様の構図が見られる。相手の善意を思うと、とても「まずかった」とは言えない、というのである。

しかし、[事例3]の場合でもそうなったように、おいしくないものを「おいしい」ということによって、その「つけ」は発言者の側にも回ってくる。心にもないことを口にすれば、結果、自分の身にも問題が発生する。ここに存在するのは責任の問題である。責任を取るという観点からすれば、このような結果を自らで引き受ける覚悟、すなわち感謝して毎年（まずい）ケーキを食べ続ける覚悟があれば、タテマエを使う行動も辻褄だけは合う。しかし、次の2点において、そのような行動の合理性は疑わしい。

第一に、このような（つまりケーキを食べるといふ）形で、責任を取りたい人はいない。仕方なしにせよ発せられる「おいしかった」という発言は、相手のためである。発言者は、自分のことを、そのまずいケーキを食べさせられる「被害者」であると考えているが、結果の主たる原因は発言にある（主たる原因をF子のケーキを作る技術にあると見ることが出来るが）。通常、タテマエを推進させる人達は、自分で責任を引き受ける用意がない。感謝されてもいない行動をあいかわらず取らなければならない相手側も結果的には被害者になる。事後の両者の関係は、あまりに非生産的である。

第二に、そのようなことを言うよりは、違うことを言うほうが、自分にとっての利益が大きい。少なくとも、妙な形で責任を引き受

ける必要がなく、被害が小さい。つまり、「おいしかったよ」と言う代わりに、「私は、もう少し～のほうが好き」という好みの問題として要望を出すことができる。プレゼントの場合で言えば、「来年は～にしてね」という形で別のものをお願いしてもよい。もし、それでもこちらの要望のものをくれないのであれば、相手は「友達」としてふさわしくはないのかもしれない。

〔事例1〕への対処に関しては、「使い分け」論の主張が優勢であった。しかし、一方で、そのような状況を何とかしたい、③のように「勇気」を必要としないまでも、何らかの方法を講じたいという願望を持っているグループがある。このグループは、例えば、次のような対処を考えている。

- ⑤ 「それもいいけど、～の方が似合う」と、遠まわしに言う。それとなく他のものをすすめる。

〔事例2〕に示したように、「それもいいけど、～の方が似合う」前半の「それもいいけど」は余計である。むしろここでの問題は、「遠まわし」にある。概して、自分の友達に向かって、「お前はデブだ」とか「もっとやせなさい」とか面と向かって言いたい人はいない。もしそのようなことが言いたいとすれば、その人は、おせっかいな性格か、少し意地悪なところがあるかもしれない。「～の方が似合う」と言って他のものを勧めることは、実は、ここで一番自分の意図に沿ったことなのではないだろうか。すなわち、「～の方が似合いそう」とか「別のものも見たらどうだろうか」と勧めることが、ここで自分ももっとも言いたいことだと考えたほうがよい。この考え方は重要である。「遠まわし」や「それとなく」ではなく、積極的にそのような発言をするを選ばなければ、常に「逃げている」という後ろめたさにつきまといわれる。この方法（この場合で言えば、別のものを勧める）でも、それを「逃げ」だと考えてしまうと、自分の意見とは違うことを言っている、

という錯覚に陥ってしまう。

先にも示したように、意見というのは、場面によっては好みの問題である。「(私は)～があなたに似合う(と思う)」のであって、他の人がそう思うかどうかはわからない。意見は自分の責任の範囲において示されればよい。「私は」「と思う」の部分が省略されることによって、好みの問題であることが忘れられてしまうと発言はしにくくなるかもしれない。発言がなされる段階で、言い手がかなりの責任を背負おうとしているという意味では自意識過剰である。聞き手が相手の発言の意味を非常に重いものと感じてしまうとすれば、過剰に敏感になっている。一般に、コミュニケーションが行なわれる過程で、お互いが神経質になっているということも考えられる。それは、コミュニケーション訓練の不足も原因しているだろうが、もう一方で、ホンネとタテマエをめぐる考え方が影響を与えていることが大きな要因となっている。

もちろん、「やせなければ本質的な解決につながらないから、そのような発言は逃げていないか」という主張も考えられる。しかし、やせたら解決するということすら「やせてはどうか」という提案であって、発言者の一意見でしかない。それほど重大な問題であると考えれば、しかもそれほど相手のことを思っているのなら、そうアドバイスした方がよい。あらためて考えても「お前はデブだ」と言いたいのであれば、やはりそれはおせっかいというほかはない。

したがって、ここでの考察を踏まえれば、ホンネとタテマエを使い分けなくとも、①自分が本当に言いたいことは何か、ということをよく吟味し、②それをどのように伝えるとよく伝わるのか、という手法を考える、という方法で、問題に対処できるかもしれない、という、ごくあたりまえの結論に達することになる。

IV 使い分けを補強する論理

しかし、この結論は簡単には採用されない。

依然として、ホンネとタテマエの使い分けを支持するための、いくつもの補強的な論拠が存在して、それらの影響を受けて、使い分けを選択することが強く促される。使い分け論者は、経験的にそれらの論理を補強しながら、確信的に使い分けを行なっている。

例えば、「言ってもよいウソがある」とする論拠によって、「本当」のことを隠して、タテマエを使用することが奨励される。その代表例のひとつが「お世辞」である。会社の上役や、目上の人にはお世辞のひとつも言わなければならない状況というのがあるらしい。人を褒めるためには、ウソもありうるというわけである。

しかし、ここには重大な見落としがある。渋谷昌三は、「ゴマスリにウソがあってはならない」と言っている⁹⁾。「お世辞」というのは「ウソ」である、と使い分け論者は考えているのだが、実はそうではない。とくに第三者がいる場面で、ある人物の褒めるに値しないことを褒めるとどうなるか。結果、発言者は周囲の人達からの信用を失うことになる。カラオケの席で、上司の下手な歌を「うまい」と言って褒めれば、誰からも「ウソつきな奴」と思われることは必定である。ましてや当の本人が自分の歌をうまくないと自覚しているなら、なおさらである。褒めことばがお世辞としての機能を発揮するためには、褒める中味は本当のことでなければならない。つまり、「私は、この歌、好きなんです」とか、「振り付けがいいですね」とか、「選曲が今日のシチュエーションにぴったりです」とか、「この歌は歌詞がいいですね」とか、当人の歌に関連して、褒められそうな（自分が責任を持って「よい」と思える）内容を探さなければならない。

清水義範は、子どもの作文を褒めて指導せよ、と言っている¹⁰⁾。しかし、ウソの内容を褒めよとは決して言っていない。「長い文章が書けるようになったね」でも、「難しい漢字が書けているね」でもとにかく「褒めるところを探して」褒めなさい、と言っている。子どもなどは、とくに、敏感である。こちら

が本当は思ってもいない内容について褒めれば、感づかれてしまう。そのようなことをすれば、一度に信用されなくなる。ウソつきの大人は、とくに、子どもから相手にされない。

お世辞とともに考えられているのが、「人を幸せにするウソがある」ということである。その例としては、サンタクロースがある。サンタクロースは、実際にはいないのだが、子どもに夢を持たせるように、親は、子どもに向かって次のように言う。「よい子にしていると、クリスマスにはサンタクロースがプレゼントを持ってきてくれるよ」。しかし、ここでは判断の主体と幸せの主体にズレがある。幸せを感じるのは子ども自身だが、幸せかどうかを判断しているのは親の側である。厳密に言えば、サンタクロースがいる、と言うと喜ぶであろう子どもの姿を見て大人の側が喜ぶのであって、サンタクロースのウソは、単に子どものためだけに働くのではない。もし、ここで子どもが「サンタクロースなんか、本当はいないよ」と発言しようものなら、「なんと夢のない子どもだ」と大人としてはがっかりすることになる。ところが、サンタクロースの「ウソ」は、大人の側で出したのだから、それで子どもが喜ばないからと言って子どもを非難するのは筋違いである。

さらに言えば、「サンタクロースがいる」ことによって、子どもはいつでも幸せで夢があるとは限らない。ある日、サンタクロースが実在しないことを知る日が来る。するとそれまで抱いていた「夢」も壊れてしまう。もちろん、「夢」は壊れたままで終わるわけではない。サンタクロースという「ウソ」は、実は、親の愛情から出されたものであるということによって、子どもの幸せが補償されるということになっている。しかし、一時は夢が壊れることによって、幸せではない瞬間があるかもしれない。

このところ、あらためて主張されているのは、もうウソはたくさんである、ということである。かつて、胃がんの末期患者に向かつては、当人をがっかりさせないようにという配慮からか、「あなたは胃潰瘍である」とい

うようなウソが知らされてきた。しかし、今日では、「余命幾ばくもないならそのことを教えて欲しい」という人達もいる。本当のことを教えてもらったほうがよく生きられるという場合もあり、従来のように、ウソをつくことが人を必ず幸せにするとは考えられない。

少なくとも、ウソがつかれる時点で、そのことが人の幸せを担保することはない。結果としてウソによって幸せを感じる人がいることまでは否定できないが、だからといって、それをウソをついてもよい根拠とすることはできない。がんの例で言えば、知らないことによって幸せである、というのは、単なる結果であって、知らせないための理由にはならない。

この「人を幸せにするウソがある」という話は、「人を幸せにするウソはよいウソである」ということから、「人を幸せにするウソはついてもよい」という論拠を用意する。人を幸せにしたのが、単に結果であることを越えて、ホンネとタテマエを使い分ける根拠になる。「人を幸せにするウソがある」という説は、「ウソをつくことはよくない」という正論を相対化する。「ウソをつくことはよくない」の一方に、「そうは言ってもウソをつかなければならないことがある」という形で、正論をタテマエ化してホンネを準備する。このことによって、「ウソをついてはいけな」という道徳の価値は貶められている。善悪を別にしたとしても、多くのウソつきは、自分のウソに責任を負いたくない。

「そうは言ってもウソをつかなければならないことがある」という主張は、言い訳として示されているだけであって、その内容が真とは言い難い。ウソを言う前からそれがよい結果につながることは明らかではない。ウソをつくことは悪いが、それでも、ウソをつくる人がいる、ということなのであって、行為をなす人物がいるからそれで許されることになったわけではない。死にたい人物がいて、殺してあげる人がいるからといって殺人は許されるものではない。やはり「ウソをつくことはよくない」のであって、この価値について譲

歩することはない¹¹⁾。

ホンネとタテマエの存在は、価値の相対化と補完的に作用する。正論は、不当に相対化されて力を失ってしまう。「人を幸せにするウソ」は巧みな形で、タテマエの存在を正当化している。

面接試験などで、本当のことを言えば、通らない可能性があるではないか、という意見も、ウソの効用として広くしかし暗黙のうちに了解されている。例えば、大学入試の面接試験で、「大学に入学してからどうしたいか」という問いに対して、「思いっきり遊びまくりたい」とか「バイトでガッポリ稼ぎたい」とホンネを言えば、合格できないではないか、という主張がある。

しかし、だからといって「～を学習（研究）したい」ということを「タテマエ」で言うことが許されるわけではない。もし面接で「一生懸命、勉強する」と発言したのなら、その責任を取って入学後は勉強しなければならない。懸命に勉強しようとする自分の（仮の）姿が高く評価されて入学が許可されたわけであるから、大学生活が勉強に明け暮れることになったとしても、大学当局としては文句を言われる筋合いはない。もし、本当に言いたいことが、「遊びまくりたい」しかなければ、通常、多くの大学では入学を許可されない。一般に、大学がそのような場所ではないからである。自分の希望と、大学の方針との間の齟齬を解決したければ、入学に値する、と評価してもらえるような内容で、自分が責任を取れるものを自分の中から何とか探し出すか、新たに自分の中に作り出すしかない。

就職の面接でも同様のことが言える。面接で偽りの自分が評価されれば、就職後ずっと偽りの自分を通さなければならない。もしそれが偽りだったということが明らかになれば、就職先にとって損失だ、ということと同時に、自分がその職場での仕事に耐えられない。

V ホンネ・タテマエ思考の本質的課題

ホンネとタテマエを使い分けるという行動

は、よい結果をもたらすものではなく、そのような行動は避けることが期待される。では、その回避は、ホンネを話すことで解決するものであろうか。

問題になるのは、ホンネの性質である。加藤典洋は、タテマエとホンネがうさんくさいのは、「タテマエが嘘」であるからではなく、「ホンネが本当じゃないから」であると言う¹²⁾。ホンネは、辞書で見られる定義のような「本心」や「信念」ではない。本人が譲れない「本心」や「信念」ならばそれは表に出てこなければならない。出さなくてもよいのは、それがその程度には譲っておける内容のものであることを示している。

増原良彦が言うように、ホンネとタテマエの間には、第三の「本心」とも言うべきものが、想定できる¹³⁾。つまり、[事例1]で見たように、「どっちだっていいや」という考えがあり得る。加藤は、この点について次のように言う¹⁴⁾。

増原の話が教えるのは、つまり、タテマエとホンネという考え方の底にあるのは、この「どっちだっていいや」というニヒリズムだ、ということなのです。

そうわかってみると、皆さん、なるほどと、思うのではないのでしょうか。土居の本では、物事にはオモテとウラの二面があり、それはある意味で、「ともに真である」とされていました。日本人の考えだと、そうなる、と土居はいうのですが、本当をいえば、答えは逆なのです。このような相補的、かつ相対的な関係構造の中におかれ、無限に両者が「入れ替わり」可能になり、「ともに真である」というのは、この双方が、真じゃない、ということなんですね。それが「真」だと信じられているとしたら、そこには、「真」に対するとてつもないニヒリズムがあるのです。

私たちはホンネとタテマエという思考の枠組みを使うことで、どちらも真実のように錯覚しながら、両方を空疎なものにして、もはやどちらが本当かわからない状態になってしまっている。

辞書的な定義に従えば、ホンネ＝「口に出しては言わない(言うことがはばかれる)

本心」¹⁵⁾である。ホンネというものは表には出ないものである。言うことがはばかれるのは当然である。そんなことを言ってしまったら、責任が取れない。だからこそ、口に出しては言わない。

面接試験の例でも、自分が希望する「遊びまくりの」大学生活が、大学当局から受け入れられるとは思えない。「思いっきり遊びまくりたい」というホンネは、他者から評価されないと自分でも感じられる希望であった。これは、面接の場ですることはできない。そんな発言をすることで出される面接の評価(すなわちかなりの確率で「不合格」となること)を受け入れることはできないからである。

[事例1]で考えられていた「本当のこと」とは、まさにホンネそのものであった。だからこそ、言うためには何がしかの勇気(勢い)が必要になってしまった。責任が取れないことを言い合えば、収拾がつかなくなってしまふ。したがって、「皆がホンネばかり言っていたら、世の中で争いが絶えない」というのは、実は、ごく良識的な見方であった。問題は、「だからホンネをしまつてタテマエを使え」という展開の中にある。

大学入試の面接は、面接者・受験者の双方が暗黙のうちにお互いの腹を探りながら進められる。「研鑽に励む」という受験者のことばは、ウソではないものの、信憑性の低い発言として語られる。マニュアル化した応答は、ホンネとタテマエの間で、面接試験を形骸化させている。形骸化した面接は、入学に際しての決意を聞くこともできず、受験者が希望を歯止め無く言うわけでもなく、どちらでもよい「儀式」になっている。

ホンネ・タテマエ問題の本質的な課題は、その対概念の構造そのものに対処しなければならぬところにある。「ホンネとタテマエ」という考え方の是非が問われなければならない。タテマエに対してホンネを想定する、考え方やコミュニケーションのスタイルにこそ問題が存在する。ホンネとタテマエという二重基準の態度による人間関係を常態化し、過

剰なまでに対立を回避するやり方を改善しなければならない。自己を護るために、ホンネを用意するやり方、実は自分が考えていることはそうではない、しかし、今のところは体勢に従って仮の姿で臨むのだ、という防衛策ではもう対処できない。まして、私たちは、教育と学習によって「ホンネとタテマエ」を拡大再生産している。「上手に使い分けなさい」という指導は、かなりのレベルで達成されてしまっている。

VI ホンネ・タテマエ式思考問題の行方

このところ、子どもの考えていることが大人によく分らない、ということから、子どものホンネに耳を傾けようとする姿勢が必要であると言われている。そこでは、子どもが大人にホンネを明かさなことが、ややもすれば、否定的な文脈で捉えられている。しかし、子どもがホンネを明かさなものは、文字通り、良識的なものを無意識にでも持っているからとも考えられる。ホンネを明かしても、その発言には責任が取れないからである。

子どものホンネを意識しなければならないとする大人の態度は、確かに必要なものかもしれない。しかし、ホンネを聞くという行動が、一方で、子どもたちの社会性を育てる機会を奪う可能性もある。大人たちは、子どものホンネを聞こうとする行動について再考しなければならない。

大方の子どもの意見はくだらない、という見方に立てば、子どもたちは、自分たちの意見を大人や周りの人達に理解してもらえるように作り変えていく必要がある。自分の認識が間違っていればそれを改めなければならない。しかし、大人がホンネをホンネのまま聞いてくれるのであれば、もはや責任を取る必要などない。

学校現場などで進むカウンセリング重視の傾向は、子どもたちのたまったストレスのガス抜きの役割を果すにとどまらず、その先に進んでいる。子どもや若者たちの一部には、「私はホンネで生きている」とか、「私はホン

ネでしか行動しない」とか、といった発言が見られる。「ホンネ」が、責任を負える信念であれば問題はない。このときの「ホンネ」が、もし、文字通りのホンネであるとすれば、それは、責任を負わない内容を言っている。これまでであれば、誰も表に出しては言わなかった性質の内容を口にしてはばからない、という状態になっている危険性がある。

タテマエというのは、他者を意識したときの、外向きの方針であった。ホンネとタテマエの間の葛藤すらない、という現実、自分勝手と批判されている現代人の生き方にそのまま重なるもののようにも考えられる。

おわりに

なぜ、ホンネとタテマエに関する分析が様々になされながら、その対処が進まないのか。対人関係のトレーニングが不足している子どもにとって、ロールプレイングなど様々な形でコミュニケーションの技術を修得することは、重要な課題である。現にそのような試みは、学校現場でも広がりつつある。その一方で、常にタテマエにホンネを対置させる現在のようやり方で自分を護る技術があるのだとすれば、それは、麻薬的に、私たちの中に浸透して、感覚を麻痺させる。ホンネとタテマエは、即効性のある問題先送りの道具として、手軽で有用な手段となった。

問題は、考え方にある。コミュニケーションの技術を身につけるだけではなく、もう一方で、考え方を身につける方法が必要である。そのことによって、個人が次の対処法を自分でも開発できる。それは、個人の良心や善意といったものを基底としながらも、しかし、道徳的なお題目を唱えることではない。道徳的・教訓的な行動の規範は、現在のやり方では、先にも示したように、思考と行動の乖離を生むことにつながってしまう。そうではない考え方の教育・学習過程が模索されなければならない。より一般的に受け入れられる形でのホンネとタテマエの克服法が考案される必要がある。しかし、段階はまだ、ホンネと

タテマエに対する根強い「信仰」に気づいていないところにある。克服は、それを意識化する過程を含む。

ホンネとタテマエをめぐる意識の問題は、学問的に「高度な」知識や技術からすれば、取るに足らないことのように見える。しかし、それは、私たちの日常生活の些細な出来事の中で価値を作り上げ、意識の根底で作用する。

ホンネとタテマエの問題は、まったく無視されてきたわけではない。しかし、その対策は、ホンネを吐露するというやり方で、展開されはじめている。ガス抜きが目的化する状態と見ることもできるであろうが、さらにいくつかの疑問が生じる。例えば、私たちは、それほど「ガス」を溜めているのか、という問題や、実はホンネとタテマエという構造事態がガスを溜めることに一役買っていないかという問題である。

ホンネとタテマエというのは、自己防衛のための装置であった。この装置は、応答すべき問題に突き当たると、タテマエを表に向かって示しながら、裏でホンネを用意する。表立って対立することなく、心のうちで相手に賛同しない。ホンネによって「タテマエに示したことは自分の意見とは違う」と自分の独立性も護る。これは、価値を相対化するための装置であり、他者の意見を巧みに無視するための装置である。

注

1) 本稿は、2001年度東海女子短期大学公開講座で行った講演「ホンネとタテマエの人間関係」(2001年9月1日)を元に、その内容を大幅に加筆・修正したものである。

また、この問題に関連しては、先に、教職課程の授業課題を中心に分析したものがある。拙稿「教育学概論授業の課題—ホンネ・タテマエ式の思考を越えて—」(全国私立大学教職課程研究連絡協議会『教師教育研究』第13号、2000年)を参照されたい。

2) 中島義道『〈対話〉のない社会』(PHP新書、1997年)

3) 大平健『やさしさの精神病理』(岩波新書、1995年)

4) 千石保『「まじめ」の崩壊』(サイマル出版会、1991年)

5) 使い分けの仕方には、およそ2つのパターンがある。

(a) 親しい相手→ホンネ

あまり親しくない相手→タテマエ

(b) 親しい相手→タテマエ

あまり親しくない相手→ホンネ

前者では、次のように考えられている。親友や親子、兄弟といったごく親しい関係では、きついことを言ってもお互いの関係が壊れないし、そういう気の置けない関係は必要である。あまり親しくない相手には、相手の意見を否定するようなことを言えば、容易に対立を深めてしまう。誰もわざわざ敵を作りたくはない。

一方、後者では、親しい相手だからこそ、本当の胸のうちは明かせない、ということがあるという。電話相談やインターネットなどの匿名の関係でこそ本当の自分が出せる、という考え方である。

本当の自分が出せる人間関係が必要だ、という点では、両者は共通しており、この点については概ね異論はないであろう。問題は、ある種の相手に対して、タテマエ(心にもないこと)を使うことが許されるか、ということである。

6) 加藤典洋『日本の無思想』(平凡社新書、1999年)128頁。引用中、「土居」とは、土居健郎のこと。土居は『表と裏』(弘文堂、1985年)で、そのように述べている。

7) いじめが減らないのは、対策の立て方が間違っているからだ、と考えることもできる。対策が正しく立てられれば、目標がタテマエ化してしまうこともない。例えば、尾木直樹は、日本のいじめ論議は実証的ではなく、道徳主義的な精神論で来たためおかしな対策がとられている、と指摘している(『学校を救済せよ』(学陽書房、1998年)84頁)。

8) 学校教育が教える学問的知識と社会の価値観とのズレについては、阿部謹也が指摘している(『学問と「世間」』(岩波新書、2001年))。

9) 渋谷昌三『人はなぜウソをつくの?』(河出書房新社、1996年)158頁。

10) 清水義範『清水義範の作文教室』(早川書房、1995年)

11) 「ウソをついてはいけない」ということは、ウソについて学ばない、ということではない。ウソのつき方は大いに学習する必要があるだろう。ウソをつける場合にのみ、ウソをつかないという選択肢が存在する。

12) 加藤典洋『日本の無思想』(平凡社新書、1999

- 年) 16頁。
- 13) 増原良彦『タテマエとホンネ』(講談社現代新書、1984年)
 - 14) 前掲『日本の無思想』62頁。
 - 15) 金田一京助ほか編『新明解国語辞典』第4版(三省堂、1989年)

—児童教育学科 初等教育—